

『信貴山縁起絵巻』にみる病と信仰

小 山 聡 子

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました小山です。本日はどうぞ宜しくお願い致します。今日は、『信貴山縁起絵巻』にみる病と信仰」という題目でお話しさせていただきます。みなさんは、『信貴山縁起絵巻』という絵巻物をご存じでしょうか。信貴山というのは、奈良県と大阪府の間に位置する山でして、その中腹に現在は朝護孫子寺という真言宗の寺院があります。『信貴山縁起絵巻』は、平安時代末期に制作され、国宝に指定されている非常に有名な絵巻物です。

『信貴山縁起絵巻』は、「山崎長者の巻」「延喜加持の巻」「尼公の巻」の三巻から成っています。まず『信貴山縁起絵巻』の成立については、二つの説があります。一つ目の説は、信貴山の僧侶が制作させたという説。もう一つは、絵巻物の蒐集家であった後白河法皇が制作させたという説です。ただし、平安時代の段階では、信貴山はあまり裕福な状況にはなかったことが分かっています。当時、絵巻物を制作するには、紙や絵の具のほか、専門の絵師が必要になるので、莫大な費用がかかります。したがって、中央の皇族、中でも後白河法皇が制作させたという説のほうが有力だと考えられます。後白河法皇が制作させたのではないかとされている理由は、まず制作年代が後白河法皇の活躍

『信貴山縁起絵巻』にみる病と信仰（小山）

していた時代と一致するという点があります。さらには、後白河法皇は、絵巻物の蒐集家であり、信貴山を篤く信仰していた人物でもあります。

さて、今日は『信貴山縁起絵巻』の中の「延喜加持の巻」についてお話しさせていただきます。具体的には、平安時代の人間が、どのようにして病氣治療をしていたのか、というお話をしようと思っています。それではまず「延喜加持の巻」のあらすじを説明します。

醍醐天皇が病氣になりました。その病氣を治すために、沢山の僧侶が宮中に呼ばれました。しかし、醍醐天皇の病氣は全く治りませんでした。そこで、信貴山の僧侶である命蓮が病氣治療の祈禱をするために呼ばれることになりました。しかし命蓮は、都から来た天皇の使者に、「私は都には行かず、信貴山で病氣治療のための祈禱をします。祈禱が終わったら劍の護法を遣わします」と言いました。天皇の使者は、がっかりして都に帰りました。それから三日後の昼頃、醍醐天皇は、劍の護法の夢を見ました。夢から覚めてみると、天皇の病氣はすっかり治っていました。天皇は、命蓮の元に使者を遣わし、病氣を治してくれたお礼に莊園を与えましょう、と言いました。しかし命蓮は、「そのようなことのために祈禱をしたのではない」と言い、受け取りませんでした。

以上が、「延喜加持の巻」の大まかなあらすじです。では、絵巻物を見ていきましょう。絵巻物というのは、詞書と絵から成っています。詞書というのは絵の説明文だと思ってください。今回は、詞書は読まずに、絵だけを見ていきましょう。最初の絵には、信貴山の命蓮に病氣治療を依頼しに行く醍醐天皇の勅使一行が描かれています（図①）。この場面は、待賢門の辺りだと考えられます。先頭を歩く蔵人尉のみが置道を歩いています。置道とは、土を一段高く盛って作られた道のことです。上卿や勅使のための道です。なので、身分が低い者は歩くことができません。この

絵巻でも、置道の上を歩いている者は一人だけです。やはりこのことも、宮中の規則に精通した者が『信貴山縁起絵巻』を描かせた、もしくは描いたことを示しています。

次の絵には、宮中の門から中へ入って行く僧侶の姿が描かれています。この僧侶は、四人の童形の従者を引き連れていますし、立派な衣を着ていますので、それなりの身分の者だと考えられます。天皇が病気になる、比叡山の延暦寺や醍醐寺、東寺といった大寺院から僧侶が呼ばれて祈祷に携わります。おそらくここに描かれている立派な衣を着た僧侶は、このような大寺院の僧侶なのでしょう。天皇が病気になる、大寺院の僧侶や、身分は低い



図① 信貴山に遣わされる勅使一行（朝護孫子寺所蔵『信貴山縁起絵巻』
「延喜加持の巻」）

だけでも呪術的な力があると考えられる僧侶が呼ばれます。

では、立派な衣の僧侶に付き従う童形の従者たちをご覧ください（図②）。まず、僧侶のすぐ後ろに描かれている二人の男性に注目しましょう。この人たちは、特殊な身分の人たちです。烏帽子をかぶらずに髪を束ねていますね。この時代、成人男性は、必ず烏帽子をかぶっていました。いわば、烏帽子が成人男性の象徴だったといっても良いと思います。それに対して子どもは、烏帽子をかぶらず、髪を束ねていました。だから、ここに描かれている従者たちは、見た目から五〇歳ぐらいの男性だと考えられますが、大人ではなく、子どもの身分であったこととなります。現在から考えると少々不思議な話なのですが、『信貴山縁起絵巻』が制作された時代には、子どもの身分を持った大人がいました。



図② 高僧に付き従う童形の従者たち（朝護孫子寺所蔵『信貴山縁起絵巻』
「延喜加持の巻」）

子どもの身分を持った大人たちは、牛飼童や大童子、堂童子として労働に携わっていました。基本的にこれらの人々は、穢れを祓う仕事や神仏の力を必要とする仕事を行っていたと推定できます。たとえば大童子は、祭礼の時に穢れを祓う役割を担っていましたし、堂童子は俗人が管理することのできない堂の鍵の管理を行っていました。なぜ童子形の大人がこの時代に必要とされたのかと言いますと、当時、子どもは神仏の世界（聖界）と人間の世界（俗界）の媒介者だと考えられていたからです。民俗学の分野ではしばしば「七つまでは神の子」と言われますが、すでに平安時代にも七歳以下の子どもを「人にあらざるもの」とし、神聖な存在として特別視する傾向があります。そのようなことで、童子形の大人は、ある意味、俗な人間にはできないような仕事を任されていたことになります。童子形の大人は、犯罪をした時には子どもも法律で裁かれました。そのようなこともあってか、平安時代から鎌倉時代にかけての貴族の日記には、童子形の大人による犯罪の記事が数多く見られます。

では次に、童子形の大人の後ろに描かれている子どもを見てみましょう。この子どもは、少々変わった風貌で描かれていますね。私は、初めてこの絵巻物を見た時に、どうしてこんな子どもがここに描かれているのだろうと不思議に思いました。実は、この子どもは、桶洗童くわしろうです。この子どもの腰の辺りには、尿管しんぽうが描かれています。携帯用トイレだと考えてもらえば良いと思います。僧侶が祈祷のために宮中に赴く時には、宮中のトイレ事情の関係もあり、このような子どもが必要とされました。僧侶が用を足したと思った時に、この従者が必要とされることになりました。僧侶たちが門に入っていく絵の隅には、門の柱に落書きをしている人々が描かれています。今、皇居の門に落書きをしてしまったら大変なことになりそうですが、この時代には日常茶飯に見られる光景でした。何気なく描かれているものの中にも、よく見てみるとおもしろいものが沢山あります。

次の絵は、信貴山の命運を今から迎えに行く人々が馬に乗ろうとしている場面です。皆さんの中で、馬に乗ったことがある人はいませんか？ ちらほらいるようですね。私は、数年前に乗馬クラブに通っていました。なぜ今は馬に乗るのをやめたかと言いますと、一緒に通っていた友達が二人も馬から落ちて複雑骨折をしてしまったからです。以前に乗馬をしたことがある私からみると、この馬の乗り方は奇妙です。おそらく貴族たちはこのようにして馬に乗っていたのでしょうか、この乗り方は少し危ないように思えます。というのは、馬に乗ろうとしているこの貴族は、両手を鞍の前と後ろの箇所置いていますよね。馬に乗ろうとしている貴族の後ろには、お尻を押して馬に乗せようとしている従者がいます。これでは馬の背中に乗るのではなく、反対側に落っこちてしまう可能性もあるのではないのでしょうか。現在の一般的な馬の乗り方は、右足を鎧にかけながら鞍の前の箇所と馬のたてがみを同時に握りヒラリと乗る、というものだと思います。私は一五三センチしかありませんが、乗馬クラブにいるサラブレッドの馬に人の手を借りずに自分で乗ることができました。それに比べて、ここに描かれている貴族は、ちょっと情けないと思いませんか。第一、平安時代の馬は、モンゴルから来た馬なので、サラブレッドよりも随分とサイズが小さいはずですよ。このような小さな馬に乗るのに後ろから押しもらって乗るといのは、平安時代の貴族がいかに運動不足だったかということをお話しています。ちなみに先ほど、こんな乗り方をしたら馬の反対側に落ちるのではないかと言いましたが、本当に落ちていたんですよ。貴族の日記を見ると、馬に乗ろうとして反対側に落ちたことにより負傷したという記述もあります。こういう乗り方をしているから落ちるんですね。

では次の場面を見ましょう。これは京都の町中において噂話に花を咲かせている人々です(図③)。おそらく、醍醐天皇が病気になるという噂をしているのでしよう。ここに描かれているお爺さんの顔を見ると、鼻が赤く

腫れ上がっています。これは、赤鼻と呼ばれていた病気です。庶民の間では赤鼻という病気がよくありました。日光暴露や寒冷刺激が原因で、このようになります。平安時代に成立した現存最古の医学全書『医心方』にも、赤鼻についての記述があります。

次の場面には、何も描かれていません。絵巻物では、空間や時間が大きく移動するときには、何も書かない紙を挟んだり、雲を描いたりします。そのあとには、山の中に勅使一行が入っていく場面があります。もう少し見ていくと、信貴山にいる命蓮の姿が見えてきます。天皇の勅使は、命蓮に、病氣平癒の祈禱を宮中で行なってくれないかと依頼します。ところが命蓮は、京の都には行かずに信貴山にいたまま祈禱をして祈禱を終えたら剣の護法を遣わします、と返答しました。勅使一行は落胆して帰京することになります。これを聞くと、命蓮という人はなんて意地悪なのだろう、と思うかもしれませんが、山から下りないとされたことにはきちんと理由があります。というのは、呪術力がある僧侶は、山から下りないと考えられています。山の靈力を身につけているからこそ、僧侶は呪術力を發揮できるのです。だから、この話の中で命蓮は、信貴山から下りずに祈禱をしたとされ

『信貴山縁起絵巻』にみる病と信仰（小山）



図③ 噂話に興じる庶民たち（朝護孫子寺所蔵『信貴山縁起絵巻』「延喜加持の巻」）

ています。勅使たちは、命蓮が上京しないとしたことに落胆して帰京し、そのことを大臣たちに報告します。

三日後、醍醐天皇は夢で剣の護法という護法童子を見ます（図④）。

剣の護法は、剣の衣を着けているので剣の護法と呼ばれています。平安時代には、霊験あらたかな僧侶は、護法もしくは護法童子を自由自在に使用することができると考えられていました。剣の護法は、右手に剣を左手に索を持つ姿で描かれており、輪宝に乗っています。輪宝というのは、もとはといえばインドの武器です。

なぜ剣の護法を夢で見たことによって醍醐天皇の病気が治ったのか



図④ 天皇の病気を治すために信貴山から疾駆してきた剣の護法
（朝護孫子寺所蔵『信貴山縁起絵巻』「延喜加持の巻」）

というと、護法童子には病氣を治す役割があるからです。護法童子は、平安時代から鎌倉時代にかけての史料に、実に多く登場します。それにもかかわらず、いまだ護法童子については、研究者の中でもさほど知られていません。その理由は、現在までの宗教史研究では、本尊への信仰ばかりに着目し、本尊の脇侍や眷属についてはほとんど論じられてこなかったことにあります。しかし、護法童子信仰の研究は、宗教史研究において非常に重要です。なぜならば、とりわけ平安時代中期以降、護法童子信仰は、実に盛んに行なわれていたからです。さらに、平安時代中期以降の病氣治療のあり方を考察する上でも、護法童子信仰の研究は非常に重要です。護法童子が夢に出てきたということは、護法童子が命運の祈禱によって醍醐天皇の元に駆けつけ、その病氣を治したことを意味しています。とりわけ平安時代から鎌倉時代においては、夢で見たことは現実であると思われていました。たとえば仏様が夢に現れて、「花子さんはあなたのが好きなんですよ」と言ったとしたら、その夢を見た太郎さんは本気にします。つまり、醍醐天皇が剣の護法を夢で見たということは、実際に剣の護法が醍醐天皇の元に現れたということになります。

次の場面では、剣の護法が信貴山から京都にいる醍醐天皇の元に走ってくる場面です。この場面で注目していた点というのは、護法童子の走り方です。この絵では、左手と左足が前に、右手と右足が後ろになっています。現在、こんな走り方、もしくは歩き方をする人がいるでしょうか。滅多に見ないですよ。一般的には、左手と右足を前に出したら、右手と左足は後ろです。剣の護法は、なぜこのような姿で描かれているのでしょうか。実は『信貴山縁起絵巻』以外の絵巻物でも、このような歩き方や走り方を確認することができます。はじめ私は、体の部分を描きたいからこのように書いたのかなと思っていましたが、民俗学の方面からは当時の人間はこのようにして歩いてきたとされています。着物が着崩れるからだとかいろいろ言われていますが、理由はよく分かりません。

『信貴山縁起絵巻』にみる病と信仰（小山）

さて、護法童子はあくまでも信仰上のものです。この点は間違わないでください。しばしば授業で話していると、平安時代には空飛ぶ護法童子という生き物がいたのだと勘違いしてしまう学生がいます。護法童子は、見える人には見えるし、見えない人には見えない、という存在です。言い換えると、呪術力がある人間には見えるし、呪術力が無い人間には見えない、ということになります。その証拠に、『信貴山縁起絵巻』でも、護法童子が空を疾走している絵の下には、護法童子の存在に全く気が付かずに葉っぱを摘んでいる女性二人が描かれています。

病気が治った醍醐天皇は、再度勅使を信貴山に遣わし、病気を治してくれたお礼として荘園を与えようとなりました。そうしたところ命蓮は、そのようなものを貰うために祈祷をしたのではないと言い、辞退しました。その様子を見ていた従者たちは、「命蓮様とは、なんと欲のない素晴らしいお坊さんだろう」と感心しました。以上が『信貴山縁起絵巻』「延喜加持の巻」です。

『信貴山縁起絵巻』は、説話をもとに作られた絵巻物です。つまり、「延喜加持の巻」の内容も、作られたお話です。ただし「延喜加持の巻」の全てが作り話ではなく、ある程度歴史的事実にのっとった上で作られています。たとえば、命蓮は信貴山に実在した僧侶です。さらには命蓮は、醍醐天皇が病気を患った時に、祈祷を依頼されました。しかし実際には命蓮は、信貴山から下りて京都へ行き天皇の側近くで祈祷をしています。しかも醍醐天皇は、命蓮の祈祷もむなしく、この世を去っています。このことは中山忠親の日記『山槐記』に記されています。

また、「延喜加持の巻」では、命蓮は食欲な心を持った僧侶ではなかったことになっています。ところが実際には必ずしもそうではなかったようです。なぜかという点、「信貴山資材宝物帳」という命蓮が書いた史料が現存しており、そこには信貴山は貧しく奇進も実に少ないという嘆きが書かれているからです。つまり、「延喜加持の巻」の内

容は、ある程度までは歴史的事実にのっとっているものの、後世に脚色された部分も数多くあるということになります。

では次に、平安時代の病氣治療についてお話していきましょう。とくに、『信貴山縁起絵巻』ができた平安時代後期にどのようにして病氣を治療していたのかということについてお話しします。この時代には、誰かが体調を悪くしたとしても、ウィルスなどのせいだとは考えられませんでした。なぜかという点、まだ科学が発達しておらず、顕微鏡もなかったからです。では病氣の原因はどのようなものだと考えられていたのかというと、物の怪や鬼、天狗などでした。これらは、人間に病氣をもたらすものだと考えられていました。平安時代中期から鎌倉時代前期は、呪術宗教の時代です。呪術が生活の中でも信仰上でも大きな影響を及ぼした時代でした。病氣の治し方を見てもそのことは言えます。たとえば『栄華物語』の七十六年間の記述の中で、僧侶の祈祷による病氣治療は八七回、それに対して薬の服用は四回です。このことは、いかに病氣の治し方が非科学的な方法で行なわれていたかを示しています。つまり、医師による治療よりも僧侶による祈祷の方が頼りにされていたということになります。

平安時代には、皇族や貴族が病氣になった時には三種類の職業の人が呼ばれます。まず一つ目は僧侶です。二つ目は医師。三つ目は陰陽師です。僧侶は加持祈祷によって病氣を治します。医師は薬や針、灸などによって病氣を治します。陰陽師は、現在でいうところの占い師のようなものでして、病氣の原因が神の場合に祭を行なって治します。

『信貴山縁起絵巻』では命運という僧侶が呼ばれて病氣治療を行なったとされていますので、今日は僧侶による病氣治療のあり方を中心にお話していきます。僧侶は、一般的には護摩修法による病氣治療をしていました。多くの場合、不動明王を本尊として護摩を焚いて病氣を治すための祈祷をしています。貴族の日記や説話には、物の怪などが

病人に近寄ってきて病氣をもたらずとされています。また、それらの史料には、よりまし憑座が物の怪の言葉を喋るといふことが頻繁に記されています。憑座というのは、物の怪などの靈魂が乗り移ることによってそれらの言葉を喋る人々のことです。憑座には、女性や子どもが選ばれました。なぜ憑座は、靈魂の言葉を喋ることができるのでしょうか。人間には、靈感が強い人と弱い人がいると言われています。ただし、理由はそれだけなのでしょう。たとえば『紫式部日記』には、一条天皇の中宮彰子が出産するときに大々的に護摩が焚かれ、次から次へと女房たちが靈魂の言葉を喋り始めた、と書かれています。はたして、それほど靈感が強い人間ばかりが宮仕えしていたのでしょうか。そうではないだろうと思います。

そこで私は、平安時代に護摩を焚く時に入れていた供物について調べてみました。すると、おもしろいことが分かりました。現在は、胡麻油や塩、練香、五穀などを供物として火の中に投じている寺院が多いです。お寺によって供物は異なり、たとえば胡麻油ではなく菜種油を使うお寺もあります。また、お香の調合の仕方などもそれぞれ違います。

平安時代には、病氣を治す時には、護摩修法の中でも調伏法を行なっていました。調伏法を行なうことによって、病氣の原因となっている物の怪や鬼などを倒すことができる、と考えられていました。

さて、平安時代中期から末期の史料を調べていくと、調伏法の時の供物に、様々な毒物が用いられていたことが分かりました。まず頻繁に用いられていたのが、白芥子です。白芥子というのは、アヘンがとれる芥子の種の部分です。芥子には、白芥子の他には、黒芥子（高菜）、黄芥子（カラシナ）、赤芥子（菜種）、青芥子（大菜）がありました。その中でも白芥子は調伏法の供物として重用視されていました。白芥子には、微弱ではありますが毒性があります。

調伏法の供物としては、附子もよく用いられていました。附子というのは、トリカブトのことです。附子は、非常に強い毒性を持っており、食べると大変なことになります。すでに平安時代の史料には、附子が強い毒性を持つことが記されています。それなので、調伏法の供物にはあえて毒性の強いものが用いられていたということになります。しかし、トリカブトを燃やした時に毒物が出るかどうかは分かりません。ただし、平安時代の人間が、毒性の強いトリカブトを燃やすことによって、なんらかの幻覚作用を期待したのであることは、言えそうです。あとは、史料には、「毒木」や「毒薬汁」を護摩壇の中に入れるとも書かれています。この「毒木」や「毒薬汁」が具体的にどのようなものかは分からないのですが、有毒な木や液体、もしくは燃やすと有毒な煙を出す木や液体ということになります。あと、供物として用いられていたものには、麻があります。麻の葉や花を入れていました。つまり大麻です。

このように、調伏法を行なう時には、毒性を持つ供物、もしくは毒性を期待された供物が多く用いられていました。悪魔が幻覚を見たり物の怪の言葉を話したりする理由には、いろいろな事柄が挙げられると思いますが、護摩を焚く時に入れられていた供物に毒性があったことも理由の一つだと考えられます。

現在は、護摩壇の上には、大きな換気扇が付いています。護摩を焚いても換気扇を回すことによって煙は上に吸い上げられますから、護摩壇の周囲にいる人たちは煙をあまり吸わなくてすみます。しかし、平安時代にはそうではありません。先ほど、『紫式部日記』に、女房たちが次から次へと物の怪に乗り移られたと書かれていることについてお話ししました。『紫式部日記』が書かれた時代には、当然のこと、換気扇はありませんので、護摩壇の周囲にいた人々はまともに煙を吸うことになったはずですが、護摩壇の周囲にいた人々が次から次へと幻覚を見て物の怪の言葉を話し始めた理由には、このようなことも考えられるわけです。

中山忠親の日記『山槐記』の治承二年（一一七八）十一月一日条には、平徳子が後の安徳天皇を出産した時の、僧侶の配置図があります。徳子がいる場所のすぐ近くに護摩壇がいくつも置かれ、それぞれの僧侶の後ろには悪座が配置されています。この図から、悪座は護摩壇の近くにいたことが明らかです。悪座は、僧侶が護摩を焚いている傍らで、物の怪に乗り移られ、物の怪の言葉を話し始めることになります。すなわち悪座は、護摩壇から出る煙を大量に吸っていたと考えられます。では、同じく護摩壇の近くにいた僧侶や病人はどうかというと、彼らも、悪座と同様に、しばしば幻覚を見ます。『紫式部日記』には、僧侶が護摩修法の最中に倒れたという記述が見えます。また、貴族の日記や説話には、しばしば病人が物の怪に乗り移られてその言葉を喋るといふことも書かれています。

最近見た史料の中でおもしろいと思った史料は、醍醐寺の成賢（一一六二—一一三二）が書いた『作法集』「驗者作法」です。この史料には、どうやって物の怪を悪座に憑けて護法（童子）に退治させるか、という過程が書かれています。今までの研究では、物の怪をどのようにして悪座に憑けるかということや、護法（童子）がどうやって物の怪を退治するのかということはほとんど明らかにされてきませんでした。

私は、『作法集』「驗者作法」をもとに、物の怪退治の過程について調べました。『作法集』「驗者作法」によると、以下の様な手順になります。

①物の怪や鬼、天狗、生霊、死霊などは、人間に近寄ることによって、病気をもたらします。

②病人が出ると、僧侶によって加持や修法が行なわれます。つまり、先ほどお話しした護摩修法が行なわれます。

僧侶は加持や修法をすることによって護法（童子）を招きます。『信貴山縁起絵巻』にも剣の護法という名前の護法童子が出てきました。

③ 僧侶は、護法（童子）を憑座の体内に入れ、病氣の原因である物の怪などを憑座の体内に呪縛します。病人の病氣は、物の怪などが憑座の体内に呪縛された時点で快方に向かいます。

④ 僧侶は病人を加持して病人の身を護ります。これは、病人に再び物の怪などが近寄らないようにするためです。

⑤ 病人の体内に入っている護法（童子）と物の怪は、憑座の口を通して病氣の原因について語り始めます。呪縛によって衰えた物の怪などは、解縛されます。

⑥ 僧侶は、護法（童子）に物の怪などを憑座の体内から駆り出させます。『信貴山縁起絵巻』に描かれているように、護法（童子）は、剣や索などを持ちます。杖を持つ護法（童子）もいます。それらを用いて、護法（童子）は、物の怪などを遠くに追いやりませす。それによって、病人の病氣は完全に平癒することになります。

私は、以上のような、成賢の『作法集』『験者作法』に書かれていることが、実際に行なわれていたのかどうかも調べてみました。『作法集』『験者作法』の記述と、『作法集』とほぼ同時代に書かれた貴族の日記や説話の記述とを比較してみました。細部に少し異なる点もあつたのですが、ほとんど同じでした。それなので、物の怪退治の過程とというのは、今お話したようなものだと考えて良いと思います。

さて、今までお話した病氣の治し方と『信貴山縁起絵巻』にある病氣の治し方とは若干異なることに気が付いたでしょう。まず、『信貴山縁起絵巻』では、憑座は出てきませんでした。『信貴山縁起絵巻』では、ただ単に、醍醐天皇が夢の中で剣の護法を見て目が覚めてみると病氣が治っていた、とされているのみです。これは、当時の人間が、護法童子が来たということと病氣平癒を結びつけて考えていたことによります。先ほど言いましたように、夢は現実にだと考えられていましたので、このようになります。

病気の治し方にはいろいろな方法があります。一つ目は憑座を用いる治し方です。二つ目は、病人自身に病気の原因となっている物の怪などを乗り移らせて病人に物の怪などの言葉を語らせる方法です。ただし後者のやり方は、病人が衰弱しているとあまりにも痛々しいことになります。たとえば、『栄華物語』の中にも、病人に物の怪を憑けて語らせたところ、あまりにも病人が辛そうで周囲の人間が見ていられなくなったということが語られています。それはそうですよ。ただでさえ衰弱している病人は、物の怪の言葉を喋ることによって、体力を消耗してさらに衰弱してしまふことでしょう。ちなみに、病氣治療の時に憑座が用意されるのは、一〇世紀後半以降のことです。それ以前は、基本的には病人が物の怪の言葉を喋っていました。

また、加持や修法の効果がなく、憑座も病人も物の怪などの言葉を喋らないという場合もあります。本来ならば、病氣の原因を知るために、物の怪の言葉を聞きたいところです。しかし、それができないのであれば病氣原因の追究はあきらめて、病氣を治すために物の怪を遠くへ追いやるという方法がとられます。

あとは、『信貴山縁起絵巻』のようなパターンがあります。命運は、信貴山から下りなかつたので、醍醐天皇の元へは行ってないとされていますよ。命運は、信貴山で祈祷をし、信貴山から劍の護法を宮中に送り込み、劍の護法に病氣原因となっているものを退治させています。この方法ですと、醍醐天皇が夢の中で、劍の護法と病氣の原因となっているものが闘っている光景を見ない限り、病氣の原因を知ることはいけませんよ。『信貴山縁起絵巻』の場合には、憑座は用意されていませんので、先ほどの物の怪退治の過程でいうと、①②のあとに、護法童子によって病氣の原因が退治され遠くへ追いやられる、ということになります。

今回は、『信貴山縁起絵巻』を見ながら、平安時代の信仰と病氣治療のあり方を中心にお話しました。平安時代中

期から鎌倉時代前期は、呪術宗教の時代だと言っても過言ではありません。また科学も発達していなかったため、物の怪などの靈魂が心の底から恐れられていました。この時代には、病氣治療には呪術が多く用いられており、病氣原因を知るために毒物も用いられていたわけです。平安時代中期から鎌倉時代前期における信仰を考える上では、呪術信仰を切り離すことはできません。

今回お話したことについて、もう少し詳しく知りたいという方は、小山聡子『護法童子信仰の研究』（自照社出版、二〇〇三年）、小山聡子『護摩修法による幻覚作用と憑座』（『日本宗教文化史研究』第二二卷第一号、二〇〇八年）、小山聡子『憑祈禱の成立と阿尾奢法―平安中期以降における病氣治療との関わりを中心として―』（『親鸞の水脈』第五号、二〇〇九年）などを読んでみてください。これらの著作物では、もう少し詳しく論じています。

それでは時間がまいりましたので、このあたりで終わらせていただきます。ご静聴、どうもありがとうございます。ございました。

【付記】

本稿への図版の掲載を快諾して下さった信貴山朝護孫子寺、図版の提供をして下さった中央公論新社に御礼申し上げます。